

本邦初の『日書』と 卜筮祭禱簡に関する包括的概説書

池澤 優

本書は、戦国～前漢時代の『日書』と

戦国楚の卜筮祭禱簡に関する、我が国で初めて的一般向け概説書である。工藤氏は今まで『日書』や『奏讞書』などの出土資料を用いた歴史研究を展開してきたおり、卜筮祭禱簡に関する研究も長い。

個人的な思い出であるが、一九九五年に中国出土資料学会（当時は研究会）第一回例会で包山楚簡に関して行った発表の記憶は今でも鮮烈である。『日書』にせよ卜筮祭禱簡にせよ、中国古代の宗教や信仰を知る上では重要な資料であり、学术界では既に衆多の研究の積み重ねがあるが、その内容がややマニアックであるため、今まで邦語での概説・入門書は存在しなかった。その意味で本書の出版の意義は極めて大きい。以下、本書の概要

をまとめる。

第一章「長安東市の日者」では、『史記』日者列伝の司馬季主の話を導入として、戦国時代に出現する日者をはじめとする民間の占い師の世界観（子彈庫楚帛書と郭店楚簡「太一生水」、その経済基盤が論じられる。

第二章「『日書』の発見」では、今までに出土している『日書』が紹介され、それが日者のテキストであることが論じられる。第三章「国家と占ト」では占いが統治行為に深く根付いた慣行であったことが示される。なお「五行や建除を中心とする日者の占法が分化して……個々の流派として析出されてゆく」（九七頁）とあるように、日者はもともと占トを総合的に行う存在であったが、占法の分化

工藤元男著
占いと中国古代の社会
——発掘された古文獻が語る



四六判 290頁
東方書店 [2100円]

の結果、日取りの吉凶だけを担当する存在に特化していったとするのが、工藤氏の基本的な見方である。

第四章「官吏の出張と占ト」は尹湾漢簡に事例をとって、地方官吏である幕生の行動がどの程度占いに左右されているかを論じる。

第五章「行旅と占ト」は、行旅の安全を掌る行神と、行旅の安全祈願の儀礼である祖道を論じる。これに関しては工藤氏には既に専論があり、本章ではそれに基きつつ、その論文への批判に対する反論などを含んだ充実した内容となっている。先ず、伝世文献と睡虎地秦簡など

□ 新刊 □

中国語文法の意味とかたち

「虚」の意味の形態化と構造化に関する研究

木村英樹 著

中国語の文法的意味と表現形式の対応を探る

により行祠の内容を詳細に復原する。出行の儀礼では、振り返ることなく大道に至り、城門の門扉の所で三回禹歩（禹に由来するといわれる魔除けのステップ）し、「某の行に咎なかれ、先ず禹のために道を除わん」と唱えて地を五画し、その中央の土を取って懷に入れる（もしくは九字を切る）。帰行の時も同様の禹に對する儀礼が存在した。

以上のように、祖道の儀礼は禹を焦点とするので、禹が行神の性格を持つていたことは明らかだが、伝世文献では累祖、共工の子の修を行神とし、禹に言及しない。このため劉増貴氏が工藤氏の禹行神説を批判しており、第五章最終節はそれへの反論にあてられる。劉氏説は、行神は五行で水に配当され、故に水官である共工の子の修が行神であるとするものであるが、考えるに劉氏の批判は的外れであり、それ程気にする必要はない。というのは、行神という概念は機能による範疇であり、禹や修といった神名とは性格が異なる。本来的にある機能を担う神が一柱しかないといふ仮定することはできず、出行の儀礼に禹が言及される以上、禹は行神の機能を担ったと考えるべきである。工藤氏が、行神としての禹の信仰は古くから民間に存していたが、それが五祀に組み込まれ整理していく過程で忘れられ、替わって累祖や修が行神とさ

現代中国語の文法的現象を取り上げ、文法的意味と形態、および文法的意味と構造の対応のありようを明らかにする。自然言語の多様性と普遍性の観点に立った考察と分析を進め、孤立語における文法のあり方を知る重要な知見を提供。第I部ダイクシスをめぐって、第II部アスペクトをめぐって、第III部ヴォイスをめぐって、第IV部構文をめぐって、付・索引

A5判 ■ 3990円

広東語初級教材

香港粵語「基礎會話」

吉川雅之 著

日常会話に不可欠な定型表現の習得から始める、丁寧な文法解説による基礎表現学習教材。練習問題の解答も含めたほぼ全ての語句・文の音声を取録した5時間超のCD-ROM付

A5判 ■ 2940円

白帝社

※価格は税込

〒171-0014 東京都豊島区池袋 2-65-1
TEL 03-3986-3271 FAX 03-3986-3272
http://www.hakuteisha.co.jp

れたとする推測は当たっているよう。

第六章「卜筮祭禱簡」と貞人・貞卜」は、楚の卜筮祭禱簡を扱う。卜筮祭禱簡は、湖北荊門の包山二号墓、江陵の望山一号墓、河南新蔡の葛陵楚墓などから見つかっている古いと祭祀の記録である。楚国では年次に定期的に（歳貞、もしくは病気の時に臨時に（疾病貞、占い師（貞人）が一年の吉凶もしくは病気の平癒について占う慣行が存在した。占いは通常、長期的には吉であるが、短期的には難があると判断され、それに対して貞人は崇りの原因、それを解除するための儀礼を提起し、その内の一部が占卜依頼者により実行された。卜筮祭禱簡のう

ち、復原できているのは包山楚簡のみなので、本章では先ず、その墓主の昭邺の社会的な基盤を探る。昭氏は典型的な世族であるが、その封邑は県より小さい。

つまり封君とは言っても、既に官僚化しているのであって、卜筮祭禱の慣習も(私的な行為というより)官僚としての意識を醸成するための公的色彩の濃い行事であった。同時期の秦と比較して、支配秩序の維持のためそのような象徴的儀礼を用いている点が「人治主義国家としての楚国の封建的体質を象徴的に反映している」(二二〇頁)とされる。但し、卜筮祭禱の慣行に公的な意味があったことを論証するには、卜筮祭禱簡が出土している墓葬が限定されている(七墓)のが何故なのか、説明する必要があるように思われる。

楚において紀元前四・三世紀に卜筮祭禱の慣習があり、紀元前三世紀以降、あたかもこれと交替するかのように『日書』が現れる。よって多くの研究者が両者の間には何らかの継承関係があると予想は

しているが、それを具体的に証明することは必ずしも容易ではない。第七章「卜筮祭禱簡」から「日書」へはこの課題に挑戦したものである。

最終章「法と習俗」は再び睡虎地秦簡を基に、秦の地方統治において地域の実情に応じた律令が定められたことを述べる。通常、時令では春夏の伐木などを禁止するが、睡虎地秦簡「秦律十八種」では夏に入って許可する旨の規定がある(甘肅省懸泉置「月令詔条」においては八月まで禁止)。また『日書』「土忌」の如き地方的信仰が律令に反映されることもある(張家山漢簡、青川木牘)、地方官がそれぞれの地方の実情に即して立法を行ったのである。官僚の墓から『日書』が出土するのも、それが為政上も意味があったからとされ、古代中国史研究における『日書』や卜筮祭禱簡の位置づけが示される。

本書は中国と日本の研究に広く目配りがされ、概説書として穏当なものになっているが、一つ難があるとすれば、

欧文の研究が全く参照されていない点である。特に Constance Cook, *Death in Ancient China: the Tale of One Man's Journey* (Brill, 2006) や Marc Kaimowski "Diviners and astrologers under the Eastern Zhou: transmitted texts and recent archaeological discoveries" (Lagerwey & Kaimowski ed., *Early Chinese Religion: Part One*, Brill, 2009) には言及するべきであった。というのは、両者とも真人による占貞と占いのテキストの間に継承関係を認めつつ、その間で何が継承され、何が変わったのかという、工藤氏が第七章で設定した問題関心と同じものに向き合っているからである。以下、第七章に限定して、それに関する工藤氏の議論を検討したい(なお付言するなら、クックは前掲書第四章で相当の頁数を割いて、この継承関係について論じるが、筆者の見るところ、全く成功していない)。

工藤氏が両者の継承関係をを示すものとして第一に挙げるのが、病気が何日に癒えるかという占いが『日書』と望山の

ト筮祭禱簡の双方に見えることである。

しかし睡虎地『日書』と比較すると、九店『日書』ではまだ五行説の原理が厳密には適用されておらず、九店の時代（即ちト筮祭禱簡の時代）にはト筮祭禱簡の真人は『日書』を使用していなかった。

次に睡虎地『日書』と『礼記』曲礼下の比較により、前者が病の直接的原因として挙げる食物は実は祭祀の供物であることが示され、祭祀を提起するト筮祭禱簡と「同一基盤に立っている」とされる。

第二に挙げられるのが九店楚簡の「告武夷」篇である。「告武夷」を遊離している臨死者の魂を呼び寄せる「招魂」儀礼の祝文とした上で、包山「ト筮祭禱簡」の「甲寅の日は邯陽に逗す」などの文言を真人が招魂を行って昭陽の魂がどこにあるかを占ったものと考え、ト筮祭禱と九店楚簡が同一の觀念と儀礼を共有すると論じる。第二の点については、包山楚簡に本当に招魂が反映されているとすれば（筆者は必ずしも李家浩氏のこの解釈に与しない）、ト筮祭禱簡と『日書』の間

に一定の共通性があることを示す材料はなる。しかし、「告武夷」は人格神的神霊を中核とする点で『日書』の中では周辺的な要素である。工藤氏が示しているように、『日書』を特徴づけるのは法則性的機械論的な五行説だからである。とするなら、第一点の方が問題になる。

先ず、睡虎地秦簡「疾篇」の背景に祖先祭祀への関心があった点は、仮にそれが認められるとしても（私見としては、祖先祭祀の供物は基本的に生人の饋食と同じだから、曲礼下との類似性だけでは、「疾篇」に言うのが供物であると断定できないと思う）、ト筮祭禱の真人が『日書』と同じ考え方をしていた証拠にはならない。むしろ九店の段階で整合的な五行説になっていないことは、真人と『日書』の間に一定の乖離があったことを示す結果になっている。この点での工藤氏の考えは必ずしも明瞭ではないが、ト筮祭禱簡と『日書』の共通性という視点と共に、両者が何が違っているのかという視点が必要であったのではないだろうか。カリノ

スキーが指摘しているように、ト筮祭禱は基本的には人格神的神霊と宗教者の個人能力に依存しているのに対し、『日書』は誰もが理解し適用することができると法則に基づき、それがテキストとされたことにより、開かれた性格を持っているからである。

この問題は、中国宗教が戦国時代にとのように変化したのかという、根本的であると同時に厄介な問題に通じる。故に、上述の点は本書の瑕瑾でも何でもなく、そのような問題に関する関心を深めてくれる概説書として、本書の出版を歓迎したい。（いけざわまさる 東京大学）

